



高柳さんのミニトマト



下から順番に実をつけたミニトマトは、おてんとさまの光を浴びて赤く色づいてきます。その輝きは本当に宝石のルビーのようですね。



ミニトマトは生育旺盛で、わき芽や下葉をかいったりひもへの誘引が欠かせません。夏のハウスの中はとても暑いのですが、手間をかけて育てています。

★美味しさがぎゅっと詰まったミニトマト

6月下旬から蒸し暑い日が続いていますね。関東はまだ梅雨があけていませんが、今年は空梅雨でおてんとさまが時折顔を出します。そしてピカリと照らすと、ミニトマトはどんどん色づいてきます。なりものは天候次第といいますが、晴れが続くことで一気に収量が上がってくる、まさに夏野菜の代名詞の1つです。

そんな夏野菜のミニトマトの種蒔きは、実は寒さ厳しい2月に行います。ビニールハウスの中に温床を作り、その上に保温資材をかぶせて、ゴマ粒より小さな種を蒔いて発芽させます。最初はつま楊枝よりも細い小さな苗ですが段々太く大きく育ち、約4ヶ月かけてようやく出荷となるのです。

そんなミニトマトに対する高柳場長の育て方はスパルタ式。苗の植え付け時に根が活着するように水をあげますが、それ以降は基本的には水をあげません。「野菜の育て方を考えるには、まずその原産地の事を考えるのが1つの基本だな」と言います。ミニトマトの原産地はアンデス地方の高地で雨が少なく乾燥気味です。そのため、ミニトマトには自分から水を求めて根を強く張ったり、空気中の水分を茎に生えている小さな毛から吸収する力があるといえます。もともと持っている力を引き出すために、原産地に似た環境で厳しく育てることで、実がギュッと詰まったミニトマトが出来るんですね。真っ赤に完熟した高柳さんのミニトマト、暑い夏の食卓にぴったりですよ。

・ミニトマトは8月中頃から卓也さんにバトンタッチします。

おかげさま農場は、「食は命」をテーマにしています。化学合成農薬や化学肥料を使わないことを基本としています。

【産地情報】

◎小玉スイカは7月5日(水)から出荷開始で20日(木)が終了予定です。期間が短いのでご注文忘れのないようにご注意ください。